

新賃金制度・学習のポイント

「賃金」の基本構造

「労働力の再生産費」という言葉があります。これは、ひとこととで言うと、私たちが、明日も今日と同じように仕事をしに来るために必要な「コスト」を指し、また、この仕事を「通常どおりにこなせる状態」のことを「労働力」と呼びます。私たち労働者は、会社（使用者）と「労働契約」を結んでおり、会社に対し「労働力」という「商品」を提供し、その対価として「賃金」を受け取っている、というのが資本主義社会における基本的な考え方です。まず労働者が労働すると、当然、「労働力」を消耗するので、それを回復、維持するため、衣食住に関わる生活必需品を得る必要があります。また、心身共に良好な状態を維持するためには、時として、書物や映画、旅行といった娯楽も必要です。さらには、家庭を持つ方であれば、家族を養うための生活費も必要です。その他、職場に来るときの交通機関の利用料、新しい技術を身につけるための諸経費等も、「労働力」を維持するための「必要経費」として「賃金」に組み込まれます。これは私たちが、原材料費や人件費等のコストをかけて作られた500円の弁当にお金を出すのと同じで、当然、安く買い叩ける性質のものでもありません。

「勉強会」を開催する意義

来年から実施される新賃金制度について理解するために、国労では、定期的に勉強会が開かれています。とは言うものの、筆者をはじめ、配布された概要書の堅苦しい文章をただ読んだだけでは、その問題点とはもとより、内容そのもののさへ理解出来ない、という方も多いのではないのでしょうか。そこで重要になってくるのが、いわゆる「スキーマ」。これは、物事を判断する際の手がかりとなる、あらかじめ自分の頭の中にある「思考の枠組み」を指します。例えば、前半に述べた理論をもとに考えると、今後廃止される「都市手当」に関して、これは、本来、鉄道利用客が多く、地価や物価の高い都市圏における仕事や生活の負担を考慮したものの。それを没にするのは、労働契約の基本を無視した「窃盗」まがいの暴挙ではないのか、といった提起が（たとえ一面的であったとしても）可能です。このように、これまで個人で学んだことを絡めながら、どこか引かかる部分を検証し、さらには、それを組合員間で共有し議論することこそ不可欠であり、この積み重ねによって、全体的な理解は深まっていくものです。

地方との不公平が生じるから都市手当は廃止すべきとの意見もあったけど、いざ地方の職場が合理化され、都市圏に転勤となった場合、そこで手当が付かないとなると、今度は反対に、それが不満として上がるのでは？



成果主義的要素が強くなれば、私たちの「労働力」が蔑ろにされるかも・・・



若い力

第 174 号

2023 年 5 月 1 日

発責 国労九州本部

博多区博多駅東3丁目9番3号

ニッコーハイツ1003号

JR 092-2075

NTT 092-483-1515